

生育期間の関係で早生種は収量があがりにくい傾向が知られている。もし、野外でマイクロチューバーを用いて採種栽培を行なったとした場合、用いる種いもは無病であるが、生産されたいもは小粒いもが多くなること、それに生育期間を長くしなければならないことから、病気の感染機会が増加し、今まで述べてきた早熟化（完熟）や無病種いもを生産する基本技術から外れた栽培方法を取らなければならないことになり、良い種いもの生産は難しいことになる。しかし、これを施設内で増殖し、基本の種いもとすれば無病が維持され、有効であろう。

2) 種いもの大きさと生育収量

通常種いもの大きさは一片が40～50 gとされているが、30 g以上（全粒）で浴光育芽等の処理が正しく行なわれれば十分な収量が期待できるという。また、高温時に植える秋作の種いもに小粒（全粒）が良い成績を上げた報告がある。このように、採種栽培では小粒を数多く生産（芽数をとる）するほうが得策

であり、これはまた採種の基本的技術である早熟化栽培により達成される。

種いもの輸出に力をいれているオランダでは、一般の生食や加工用栽培に用いる種いもは全粒で径28～35mmの小粒が最も多く、次いで35～45mmであり、その価格は小粒の規格ほど高価である。よって種いも生産者はこの規格の種いもを生産しようとするが、これには m^2 当たり30本の主茎を立てなければならないので、茎が約6本出る45～55mmの大きい規格のものを10 a 当たり5,000～7,000個（全粒）使用するといわれる。これらのことから、小粒全粒いもは切断しなくてよく、育芽処理を行なえば十分な生育をおこなうことが実証されており、わが国でも小粒全粒種いもの良さを考えねばならない時期に来ているのではなかろうか。このような種いもの生産には、単位面積（ m^2 ）当りの茎数を確保（30本）した上での栽培管理が必要になり、加えて種いもの流通を重量からいも数（芽数）へ変換することが必要となるであろう。

サツマイモが宇宙食に

「川越の原さん腕ふるう」

サツマイモは宇宙船内で簡単に水耕栽培でき、栄養満点のアルカリ性食品のため、宇宙食に最適として、NASAや米国アラバマ州のタスキギ大学で研究されていた。川越のサツマイモ料理研究家の原さんは、栽培されたサツマイモの料理など活用方法を伝授するもので、すでに今年八月に渡り「イモアイスクリーム」などを披露して評判になっている。

NASAが進めている宇宙船長期滞在計画は近い将来に実現される。この計画に基づき、タスキギ大学では、NASAの要請で宇宙食が本格的に研究されていた。この中でサツマイモが見直され、宇宙食に取り入れられる試みが進められていた。サツマイモは、穀物と野菜の両面の「顔」を持ち、食物繊維のほか、ビタミンCやカルシウム、カリウムなども豊富なアルカリ性食品。しかも、水耕栽培で十分に育つことから、宇宙飛行士の野菜不足解消には欠かせない食料となっているという。

すでに、タスキギ大学内に模型宇宙船が出来、その中で栽培にも成功、実用化の段階に入っている。今年八月には同大学で世界二十四ヶ国からの研究者が参加して「サツマイモシンポジウム」が開かれたが、このメインテーマも宇宙食。日本代表の原さんは「川越いも友の会」のメンバーとして、「サツマイモジュース」「キン-ton」「アイスクリーム」「イモハンバーグ」などを料理実演、各国代表の絶賛を受け、特別賞を受賞した。

「栄養豊かなサツマイモをもっと多くの人に食べていただきたい」と願う原さんは、東京家政学院大学の講師を務める一方、三年前から市内に料理店「エプロン亭」を開店、サツマイモ料理のPRに懸命。それだけに、今回、アメリカで浮上したサツマイモの宇宙食実用化には、大きな期待を寄せている。

（読売新聞埼玉版H3・10・20）